

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

(財)日本イタリア京都会館は、4月1日より公益財団法人 日本イタリア会館 になりました。

現代イタリア事情 -Italia oggi- 第13回

* イタリア人とカトリック教会 *

立元 義弘

2013年は前法王ベネデット16世の突然の退位表明を受けて、アルゼンチン出身のホルヘ・マリオ・ベルゴリオ枢機卿が、フランチェスコの名で第266代ローマ法王に即位という出来事で始まりました。後継法王を選出する枢機卿たちがバチカンのシスティーナ礼拝堂にこもって行われる密室選挙、“コンクラーベ”は、“根競べ”を連想させる語呂の良さも手伝って多くの日本人にも馴染みのある言葉になりましたが、今回はイタリア人とキリスト教の関わり合いについての話です。

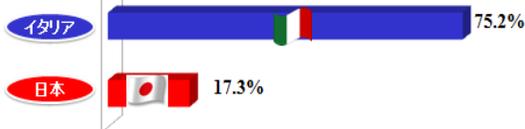
「あなたは日本人だからきっと仏教徒なんですよね。」—イタリア人からしばしば訊ねられる質問です。10人中9人以上がカトリック信徒であるとされるイタリア人からすればごく自然に出てくる質問なのでしょう。しかし、私はこの質問に一瞬どぎまぎとしてしまいます。実家は浄土真宗だと親から聞いてはいますが、冠婚葬祭を除けば日常生活ではおよそ宗教や信仰とは無縁の生活です。新年の初詣もリクレーション感覚で出かけるには出かけますが、お寺と神社をはしごしたりします。ですからこの質問を受ける時はいつもそうした“実態”が頭をよぎり、素直に「そうですよ。仏教徒です。」と答えるのに抵抗を覚えてしまいます。かといって、「いやあ、難しい質問ですねえ。」などと答えると、その後の説明に多大なエネルギーを費やさなければならない羽目に。チャペルで結婚式を挙げ、神社で子供の節句を祝い、お寺で先祖の供養することに特段の違和感も持たず、普段は

宗教や信仰というものについてあまり意識することがない、こうした姿が私だけではなく、神仏習合の文化を持つ日本人の多数派なのではないでしょうか。

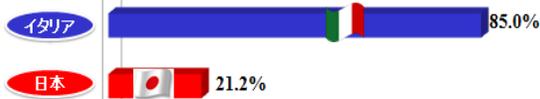
そうした私たちが、首都ローマにカトリックの総本山、バチカンを抱えるイタリアの名を聞いて思い浮かべるのは、各地の教会建築物やキリスト教にまつわる多数の芸術作品でしょう。ですから、多くのイタリア人が日本人に対して持つイメージの裏返しで、我々日本人もイタリア人はみんな日曜には欠かさずミサに出かける敬虔なカトリック信者なのだろうと考えてしまいます。

確かに軽く膝を折り短いお祈りを捧げて教会の前を歩き過ぎる婦人の姿を見かけることがしばしばありますし、イタリア勤務時代の話ですが、私も、普段はシモネタジョークを振りまき、およそ信仰とは縁のないような同僚が、ある日同乗した車でとある教会墓地の前を通り過ぎる時にさっと十字を切る姿を目にして驚いたことがあります。実際、日本人に比べると宗教や信仰に対する意識は高く、電通総研の世界主要国価値観データブックによると、「あなたの生活にとって宗教の重要度は？」との質問に対して、とても重要・やや重要と答えるのはイタリア人が75%、日本人は17%です。また、「自分を信心深いと思うか？」という質問に対しては85%のイタリア人が「そう思う」と答えているのに対して日本人は僅か21%にとどまらず。

あなたの生活にとって宗教はどの程度重要ですか。
⇒ 非常に重要・やや重要と答えた人



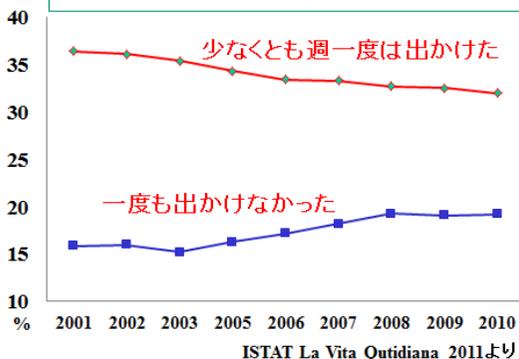
自分を信心深いと思いますか。⇒ はいと答えた人



出典：電通総研 世界主要国 価値観データブック

しかし、このことをもってイタリア人は日々のお祈りを欠かさず、毎日曜のミサには必ず出かける熱心な信者なんだろうと考えるのは早計といえるようで、実際にキリストの教えを守り敬虔な信仰生活を実践している人は意外に少なく、ISTAT (国立統計局)の調査によると、一年を通じて少なくとも週に一度は教会に出かけたイタリア人は32%だけで、5人にひとりは一度も出かけなかったと答えています。さもなければ5千万人のイタリア人が日曜の朝のミサに押しかけることになり、どここの教会も大入り満員の状態になってしましますが、過去10年間の傾向を見ても教会離れが進んでいるようです。

一年間にどれくらい教会に行きましたか。



とはいえやはりカトリックの国、全国津々浦々にはりめぐらされた2万6千に及ぶ教区網によって、カトリック教会は地元住民の精神生活の拠りどころとしてだけでなく、様々な地域活動の拠点としても実生活に深く根ざしています。また、カトリックの教義では、洗礼、堅信、聖体拝領、告解、婚姻、叙階、病者の塗油という七つの“秘跡”がありますが、聖職者を対象とする叙階の秘跡を除く

全ての秘跡で多くのイタリア人は、それこそゆりかごから墓場まで教会のお世話になって一生を過ごすのです。

成人後に入信する場合もあるので必ずしも生まれた時とは限りませんが、多くのイタリア人の人生で最初に受ける秘跡は神の子として魂の保護を願う洗礼です。そしてキリスト教の教えや秘跡の意味がきちんと理解できる年頃、10才前後になると、キリストの証人として聖霊の恵みを受けられるとされる堅信式に臨みます。これは大人の仲間入りを祝う元服式のような意味合いを持ち、わが子の成長を願う親にとっては大事な儀式です。当然ながら洗礼と堅信の秘跡は一生で一度しか受けることのできない秘跡です。

洗礼と堅信の秘跡を授かると聖体拝領を受けることができるようになります。ミサなどの祭祀の最後に、キリストの分身と考えられるオスティアと呼ばれる丸い小さなせんべいのようなパンを司教や司祭から列席者のひとりひとりが順番に授かる儀式です。

また、カトリック教会を訪れたことのある方なら内陣の隅にいくつかあるカーテンと子窓のついたボックスに気付かれたでしょう。犯した罪に対する神からの赦しを求める儀式である告解の秘跡の行われるところです。

神の前で夫が妻を、妻が夫を互いの一生の伴侶として永遠の愛を誓う婚姻の秘跡。カトリック教会では、パートナーとの死別やよほどの理由がない限り、この婚姻の秘跡を解消することはできないことになっています。

そして人生の最後に受ける秘跡が病者の塗油です。臨終を控えた重篤な病人に対して罪の許しを請い、魂の平安を求める人生最後の秘跡で、病床の枕元で司教や司祭が今わの際の病人のこめかみと手にオリーブ油を塗る儀式です。

また、イタリア人の中には根強い奇跡信仰があり、今も6割のイタリア人が奇跡の存在を信じていると言われています。

ナポリの守護聖人サン・ジェッナーロの血液がおさめられているとされる2本のアンプルは年に3度液化化することがあり、液化化した時はナポリの町に良いことが起こると熱狂的に信じられ、その様子は毎回新聞などで報道されます。



【サン・ジェッナーロの血液の2本のアンプル】

また最近の新聞記事では、シチリア島アグリジエントの田舎町に住むある若夫婦が街で買い、寝室に飾った聖母子像の油絵のマリア様の目から血の涙が流れるのを見つけ、その話を聞きつけた多くの人々が靈験にあやかろうと“巡礼”に押しかけ大騒ぎになっていると報じられました。このニュースで更に興味深いのは、この絵についての奇跡の真偽調査が軍警察の科学捜査局に委ねられたという大真面目な取り組みが紹介されていたことです。

新約聖書にはイエス・キリストの行った数々の奇跡について語られていますし、キリスト教自体が科学では説明できない出来事を神や聖霊の導きによるものとする教えがあつてのことでしょうが、毎日敬虔な信仰生活を実行し、毎週ミサに出かけているかどうかは別にして、イタリア人はこういった信仰深さも具えているようです。因みに現在でもカトリック教会では福者、聖人として名を連ねるには、殉教の場合を除いて、現代の科学では証明できない事象、即ち神の力による奇跡を起こしたことを認められる必要があるとされていますが、バチカン教皇庁にはその神学上、医科学上の厳密な調査を行う専門の組織機構があります。

一方でカトリック教会は、世論形成に対しても大きな発言力と影響力を持っています。実際に法王のみならず高位聖職者などが政治や社会問題に対してマスコミを通じたコメントや注文を発することも稀ではありません。

しかし、教会と深い関わりを持つイタリア人も、様々な社会問題に対してはカトリック教会の示す立場をそのまま盲信するというのではなく、現実的な眼で世の中を見ているという姿もうかがえます。ある調査によると、教会は政治に介入したり影響を及ぼしたりすべきではないとするイタリア人が約半数で、信仰と現実社会とは別の次元の問題であるという考え方が浸透しているようです。実際に教会が否定的な立場を取る諸問題に対しても、例えば避妊具の使用賛成派は74%、安楽死を認めるとする人は79%、人工授精を是とする人は80%に上っています。一方で、学校の教室に十字架を懸架すべきかどうか賛成派と反対派の間でしばしば議論になります。1929年にイタリア王国とバチカンが相互に主権を認めあったラテラーノ条約でイタリアの国教とされたカトリックですが、1984年の条約改定ではその条項は廃止されています。しかし、現在でもこの問題については伝統を重んじる賛成意見が多数派で60%のイタリア人が懸架すべきであると考えており、5人に4人が自分の子供にはカトリック教育が必要であると考えています。

今回は“自称”仏教徒の、キリスト教には縁もゆかりもない門外漢がイタリア人とカトリックなどという大それたテーマを取り上げました。カトリック信徒や専門家の読者が居られれば筆者のキリスト教理解に対するご指摘やご異論もあるかと思いますが、これが私の目に映るカトリック教徒と現実主義者の二つの顔をバランスよく備えたイタリア人の姿です。

(大阪大学講師、元パナソニックイタリア社長)

イタリア発月刊日本語新聞

COMEVA?
Pubblicazione mensile distribuita in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

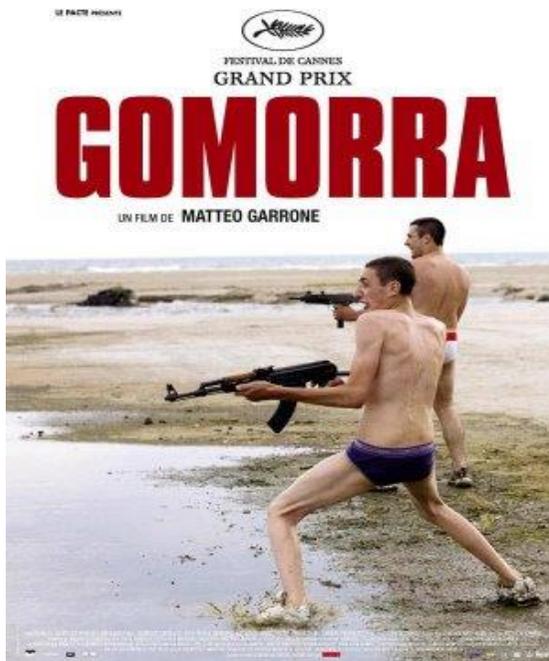
編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

イタリア通信

第13回『地獄に飲まれず、地獄を生きる
—Roberto Saviano, *Zero Zero Zero* を読んで—』

深草 真由子

ロベルト・サヴィアーノ、ナポリ生まれの33歳。一作家、一ジャーナリストという枠を超え、今ではマフィアとの闘いにおける市民社会のシンボルのような存在になっている。第一作目の *Gomorra* では小説、エッセイ、報道記事、告発文のスタイルを交錯させながら、ナポリとその近郊を本拠地とする犯罪組織“カモツラ”の実態を暴きだした。中国人の遺体がナポリ港からコンテナに積み込まれ故国へと運ばれること、ハリウッド女優が着るメイド・イン・イタリーのドレスを作るほどの優れたデザイナーが、カモツラに低賃金で雇われ、苦しい生活を強いられていること、少年たちがいかに軽々しい気持ちで銃をにぎるかということ。サヴィアーノの著作あるいはそれを原作とした映画(マッテオ・ガッローネ監督、2008年公開)を通して、高度に資本化したマフィアがいかにして暴力と死、不正を展開し、社会を腐敗しているのかを目のあたりにして、衝撃を受けた人は多いだろう。



【映画化された *Gomorra* はカンヌ映画祭でグランプリを受賞】

Gomorra は五十以上の言語に翻訳され、世界的なベストセラーとなった。(Roberto Saviano, *Gomorra*, Mondadori, 2006/大久保昭男氏による邦訳『死都ゴモラー世界の裏側を支配する暗黒帝国』、河出書房新社、2008年)。

サヴィアーノは *Gomorra* の出版後にカモツラから死刑宣告を受け、2006年10月以降カラビニエーレの護衛のもと、居を転々としながら暮らしている。だが彼を追いつめるのはカモツラだけではない。マフィアと何からの形で共存している権力機構やマフィアの後ろ盾に恩を着る人々にとっても、サヴィアーノは疎ましい存在かもしれない。国際的に成功した彼を恨めしく思うジャーナリストや文筆家もいるだろう。またそうでなくとも、サヴィアーノの言葉によって、自分が大切にしているものが傷つけられたと感じる者もたくさんいるだろう。南イタリアに住む人々はその自然豊かな大地、故郷への愛着と、マフィアの基地であるという事実の間で動揺するだけでなく、よその地方、よその国の人々からの偏見にも苦しんでいる。そんな人々にとって、サヴィアーノは南の悪評をむやみやたらと言ひ募る人間として映るかもしれない。一方、二十年以上前からマフィアが北イタリアの経済をも握りつつあるという事実は、北部の人々にとって「受け入れがたい真実」だろう。「北伊をマフィア呼ばわりするサヴィアーノにNoを！」という、反サヴィアーノの署名が集められたことさえもある。「お前はナポリの悪徳をネタにして売名し、金を稼いだ。この町には二度と帰ってくるな。」*Gomorra* のあと、ナポリではそんな反応も見られた。—Non c'è peggior sordo di chi non vuol sentire. 聞く気のない者ほど耳の遠い者はいない。—

サヴィアーノの第二作目のノンフィクション小説 *Zero Zero Zero* (Feltrinelli, 2013)がこの四月に出版された。しばらく売れ行きランキングのトップを飾りつづけるだろう。イタリアでは、パンやピザを作るのに最適な小麦粉は「ゼロ型」、そしてそれよりさらに細かい小麦粉で、お菓子づくりに使うものは「ゼロ・ゼロ型」と呼ばれる。よってこの本のタイトル *Zero Zero Zero* が意味するものは、さらに一段と細かい白い粉末のこと、つまりコカインである。使用したことはもちろん、見たことさえもない者に

とってはいまいち実感がわからないが、「コカインを通して世界が見える」とサヴィアーノは言う。



【ロベルト・サヴィアーノ】

誰がコカインを使っているのだろうか？「それは今、君の隣の席に座っている人、君が帰宅時に乗るバスの運転手、あるいは君の息子、君の上司、彼の秘書、彼の愛人。あるいは君の町のバールにコーヒー豆を運搬するトラックの運転手、あるいは今、君のおじいさんのカテーテルを交換している看護師…君が住むアパートの建築業者、君が寝る前に読む本の作家、君が見るテレビニュースのアナウンサー。もしこの中の誰もコカインなんか吸ってないと思うなら、それは君の見る目がないからか、あるいは君が嘘をついているからだ。それとも単に、君自身が吸っているからか」。コカインは決して遠い世界の問題ではない。そう前置きしたうえでサヴィアーノの語りは始まる。

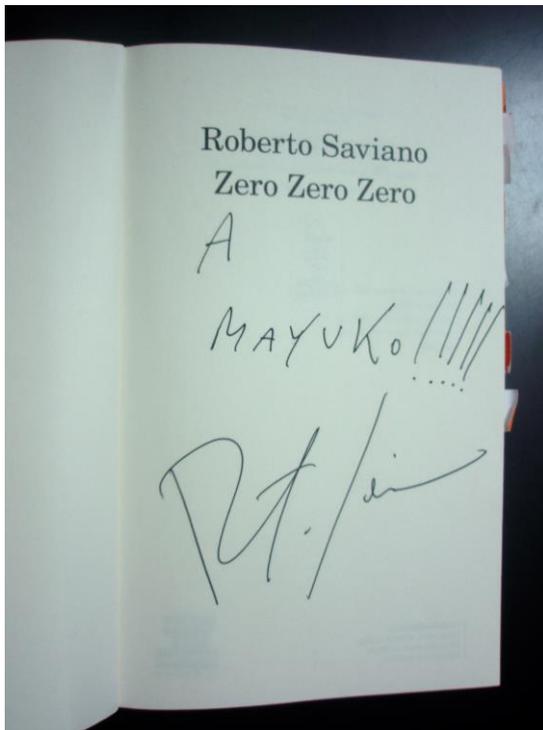
メキシコの麻薬戦争、ロス・セタスとグアテマラのエリート部隊カイビルの関係、コロンビアのコカイン資本主義。そして舞台はラテンアメリカから大西洋の反対側へと広がる。南米のカルテルと結びつき、コカイン密輸によって莫大な富を築いているイタリアのマフィア、一大マーケットであるヨーロッパの倉庫と化したギニアビサウなどの西アフリカ諸国。コカを栽培する南米の農民からヨーロッパの広場をうろつく売人まで、命の危険を冒す運び屋から、決して自分の手は汚すことのないブローカーと組織のボスマで、麻薬取引のあらゆる過程とマフィア犯罪のメカニズムを解き明かしながら、それに関わる人間の強欲や愚かさ、弱さ

をサヴィアーノは生々しく描き出す。凶暴さを身につけ、どこまでも残酷になる人間たち。一方で単なる肉の塊として簡単に殺され、跡形もなく抹消される人間たち（命を狙われる警察犬や、コカインを胃袋に詰めこまれて運搬させられ、殺される犬たちも…）。悪とカネによって社会が蝕まれていくさま、闇の世界の人間模様をサヴィアーノは告発する。中でも、ピラミッド型の権力構造をもつシチリアのコーザ・ノストラとは異なり、逆ピラミッド型「というよりもむしろそのラインが無限に伸び広がるV字型」、つまり組織の末端が膨大で、中核が隠されたカラブリア地方のマフィア“ンドランゲタ”の使い走りとなるブルーノのエピソードは切なく悲しい。父親の大理石工場を若くして引き継いだ真面目な青年ブルーノは、事業の借金を抱えていたことで足元を見られ、またスペイン語に堪能だったということもあり、ンドランゲタに脅されて南米カルテルとの橋渡し役を引き受ける羽目に陥る。数年後、警察署へ駆け込む決心して司法協力者となるのだが、最終的にはまたンドランゲタの手下になってしまう。「140人を逮捕させ、5トンのコカを押収させ、カラブリア・コロンビア間の取引の実態解明に協力してやったのに、国は俺の人生を台無しにした。1000ユーロにも満たない収入で食っていけるか！」

マフィアに命を狙われる身でありながら、しかもある一部の人々の反感を買いながらも、サヴィアーノが書き続けるのはなぜか。たとえば拷問シーンを描きながら、彼は何を思うのか。「殴打一発ごとに、歯が抜け落ちるたびに、電気ショックのたびに、その痛みは妻と息子たちへの膨らむ想いで耐えきれなくなる。…家族とどんな関係にあらうとも、自分の責任で彼らが報いを受ける羽目になるかもしれない時、その痛みは耐えがたいものだ。自分の過ちのために、自分の決断のせいで、誰かがこの痛みを味わうのではないか？ そう考えるだけで胸が張り裂ける」。また、危険を承知の上でエル・サルバドルのギャングの取材を続け、2009年に殺害された報道写真家クリスチャン・ポヴェダの生きざまと、彼の遺体を前に「殺されるのは目に見えていたのに…自業自得だろう」というあまりに無慈悲な世間の反応を、サヴィアーノはどう受け止めているのか。巨大すぎる悪を前にし

ては、どんな英雄の死も犬死にでしかないのかもしれない。命がけでマフィアと闘い、無惨にも倒れた人々がこれまでもたくさんいたが、それにもかかわらず世の中は何一つ変わりはしなかったから…。それでもサヴィアーノはこの絶望の、さらなる深みへと下りてゆく。吐き気がするほどに。それまでの日常生活のささやかな幸せのすべてが、虚構の上に築かれた偽の世界の無意味な出来事のように思われるところまで。

一見したところ何も見えなくとも、実はすぐそばに広がる地獄的風景に目をこらし、そのあり様を理解し、その現実を「生きる」と(著作の中で何度も“starci dentro”と表現される)。これが *Zero Zero Zero* におけるサヴィアーノの終始一貫した姿勢である。知ること、知ろうとする意欲が、権力を揺さぶる。悪を打ち倒すために、あるいはそれが困難であるとしても、せめて無意識のうちに悪に加担したり、悪を許容したりしないように生きる。それを可能にするための武器となるのが知識と、それを肥やしに培われる文化の力ではないだろうか。



【新作 *Zero Zero Zero* と著者の直筆サイン】

(元当館スタッフ)

イタリアンレストラン紹介

～大阪・扇町～

VENTRATA

ヴェントラータ

お手頃な料金で、
お客様が必ず納得されるイタリア料理を！

特典(日本イタリア会館会員証をお持ちの方)
小さなデザートをサービス

住所: 大阪市北区天神橋 3-6-22 ミナミビル 1階

地下鉄堺筋線扇町駅 4号出口から天神橋商店街南へ2分

電話: 06-6354-2336

営業時間: 12:00～13:30(ラストオーダー)

18:00～22:00(ラストオーダー)

定休日: 月曜



…会館だより…

文化セミナーご案内 『カンツォーネ講習会』

日時: 第1回 2013年6月14日(金) 14時～16時

第2回 2013年6月21日(金) 14時～16時

1回分 個人維持会員 2,500円 受講生・一般 3,000円

2回分 個人維持会員 4,000円 受講生・一般 5,000円

ナポリ民謡の名曲「帰れソレントへ」や、日本でも人気のポビー・ソロの名曲「ほほにかかる涙」など、4曲を歌います。皆で楽しく歌うことが目的なのでお気軽にご参加ください。

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>